博士論文　概要

関西学院大学大学院　法学研究科
博士課程後期課程　政治学専攻
平石 知久

題：丸山眞男「永久革命としての民主主義」の形成と展開

本稿は戦後日本の政治学者、丸山眞男の思想を発生史的アプローチで分析し、その中心的思想である「永久革命としての民主主義」の形成過程とその後の展望について論じたものである。構成ははじめに、第一部（三章立て）、第二部（三章立て）、中間考察、終章、おわりに、である。以下ではその概要を章別に記述する。

はじめにでは、思想史学における潮流を史料に対する認識という視点から概観し、史料選定に関する観察者の問題意識の重要性を述べた。その上で、筆者の問題意識を近時の政治状況を提示しつつ述べ、こうした状況に対する意味付けとしての思想という定義を丸山の言から引き出す。また、若尾政希の発言を引きながら、思想史の課題は思想の形成過程を丹念に追うことで、その思想家が現実とどのように関わっていったかということを明らかにする営為であることを確認した。以上によって、丸山の思想を発生史的に分析する現代的意義を明示した。また先行研究については、笹倉秀夫や冨田宏治、飯田泰三らの研究を主たるベンチマークとしていることを示した。

第一部の主たる内容としては、丸山の著作において、理性による内面の規律や計算可能性という意味での「合理性」の潮流を明らかにした。第一部第一章では最初期の論文「政治学に於ける国家の概念」において提唱した「弁証法的な全体主義」について取り上げた。丸山は「弁証法的な全体主義」をマルクス主義的なものを念頭に置いていたとしていた。個人が国家を媒介としつつも、それに対して否定的独立を保持しようとする関係は、笹倉が指摘するように民主主義原理と自由主義原理との相剋であると理解できるが、同時に自明のように存在する国家については等閑視されていた。筆者はここに、丸山が国家の存在を不可避と見る視点を有していた、という意味を付与した。そしてこの国家の不可避性をヴェーバーの近代化＝合理化テーゼ及びその帰結としての全般的官僚制化と、マルクスの物象化論をヴェーバーの計算可能性としての合理性で基礎づけたルカーチの物象化論の影響と判断した。

第一部第二章では、戦中期の丸山の著作がまとめられた『日本政治思想史研究』を、主体における合理化、すなわち内面の規律原理の探究として位置付けた。丸山は「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」において徂徠の聖人および宣長の神を、ヴェーバーがプロテスタンティズムの神に見た超越性として理解しつつも、そこに倫理的要請という契機の不在を見ていた。他方丸山は、「近世日本政治思想における「自然」と「作為」」において作為の論理が普及する一方で、同時に自然的な世界観が通底し続け

ることを指摘していた。自然法秩序の展開を分析したボルケナウの分析に照らし、そこには人間本性の堕落という認識や原罪の欠如という要因が読み取れる。超越神、すなわち信仰を通じて内面にのみ存在する神による倫理的要請と、人間は規律がなければ悪に誘惑されるという性悪的な人間観とが合着することで、資本主義社会に適合的な「主体」を生み出す。このようなヴェーバー及びボルケナウの分析と、丸山が『日本政治思想史研究』で抽出した日本における思想的課題とから、筆者は内面の規律という合理化＝脱呪術化、それを可能にする原理としての超越的実在による倫理的要請こそが、当時の丸山の問題意識であると結論づけた。

第一部第三章では、「永久革命としての民主主義」が提唱される戦後期の丸山の著作を対象に、丸山の思想的限界を明らかにした。50 年代における大衆社会化及び社会の官僚制化傾向に対する危機感と、「日本の思想」に明確に見られる前近代と脱近代の重畳への認識とが相まって、丸山は戦後初期の近代的主体への追及を大幅に修正するに至った。「永久革命としての民主主義」は制度化、すなわち運動が制度へと転化する際に不可避にもたらされる物象性を回避するためにプロセスとしての民主“化”を評価するものであるが、ここには上の官僚制化を否定する原理を内包していた。同時に、天皇制という下意識の呪術性を放逐するために「人間として生まれたことに価値があり」、「同じ人は二人といない」と考える「個性の究極的価値」に立脚する理念を、「永久革命としての近代化」として掲げた。だがこの二つの「永久革命」は、論理的には「合理性」の檻の中にあった。前者は結社形成性という組織性、すなわち合理的運営のために組織の原理が個性を抑圧するという傾向性を内包し、また後者はフーコー的な主体権力の問題と、裏腹の関係にあったことを本章で指摘する。

第一部で明らかにした潮流に対して、第二部では丸山における第二の潮流として、必ずしも理性に還元されないような価値の相剋、その表れとしての政治という概念をめぐる流れを叙述した。まず第二部第一章では、丸山が「政治学に於ける国家の概念」の執筆とほぼ同時期、東京帝大助手として採用された時期に取り組んだ英米独の諸著作に関する書評を対象にした。この書評の選定や取り上げた内容および当時の情勢から、丸山の問題意識として人民戦線の問題が顕在化していたことを明らかにした。人民戦線という丸山の問題意識の前提には、クロスマンが指摘するようにプラトン以来の「真理による独裁」の系譜に連なるコミュニズムの位置付けがあった。そしてマルクス主義のドグマティズムを超える政治的実践としての人民戦線は、丸山にとってコミュニズムと自由民主主義を架橋しようとする思想的な営みでもあった。ここにおいて、真理価値としてのコミュニズム思想と、政治的帰結を重視する思想的営為およびその顕現としての反ファッショ人民戦線とは、真理価値と政治的価値との相剋として描いた。

第二部第二章では、丸山のいわゆる「スターリン批判」に関する論考や対談を対象に、丸山の問題意識を分析した。丸山はコミュニズムの思考が、あらゆる現象を一つの原理によって一貫して理解しようとする「一枚岩的思考」や「本質顕現論」という病理を内包し、

それが他陣営との協働の否定やドグマティズム（「正統病」）、政治的な結果主義からの逃避をもたらしていると批判する。したがって丸山は、トロツキーの暗殺をはじめとした数々の疑わしい側面を承認しつつも、反ファシズム戦争を完遂したスターリンの政治的資質を、コミュニズムの上記問題を超えるものとして評価するのである。だが丸山は、スターリンの政治の論理を突き詰めた先にある、全ての政治的決断を結果だけから判断して「やむを得ない」とするような悪しきマキャヴェリズムも、同様に否定する。丸山はコミュニズムが本来的に持っている、権力を批判する理念やヒューマニズムといった価値観から政治の必要性を掣肘することで、悪しきマキャヴェリズムがもたらす権力の無限増殖を中和しようとしていた。すなわち丸山にとって「スターリン批判」は、倫理価値と政治的価値の対立として位置付けられることを本章で明らかにした。

第二部第三章では、丸山が美的価値―ここでいう美は芸術的価値にとどまらない生活性をも含む―が、政治権力への抵抗の原理になりうる可能性にも賭けていたことを明らかにした。その背景には戦後直後の丸山において既に人間が「量化」される―人間が計算可能性としての合理性という鋳型に押し込められる―ことへの危機感があった。ここから丸山が文学において、等質的な人間観を打破するような、すなわち個性的な人間観を擁護するような可能性を見出そうとしたことは十分に理解できる。丸山は『日本政治思想史研究』において、宣長による私的領域の独立に非政治化という危険性を見出していた。しかしそれにもかかわらず、1950年代末から60年代にかけて、丸山は私的領域―これは生活領域も含む―へのコミットが、政治的抵抗になることをより積極的に認めていく。その内奥には70年代、80年代に明言されるように、真理や倫理が理性的人間と、芸術が立脚する個性的人間との相剋としての、丸山の「近代」観があった。すなわち、丸山にとって美的価値へのコミットは、その他の価値による専制に抵抗するという政治的役割を果たすものであったことを明らかにした。

中間考察では上の第一部・第二部で明らかにした内容から、丸山における「合理性」、「政治」、「人間」という三つの概念を重要なものとして抽出した。すなわち、丸山にとって「合理性」とは、主体的自由の淵源たる内面の規律として機能する面を評価しつつも、この複雑な世界における全ての事象（人間をも含む）を一貫した理論で理解しようとする性向、そして人間を数値化する暴力として機能する恐れを常に伴っていた。これに対して丸山における「政治」の用例からは、真善美という諸価値の対立という位置付けを抽出できた。それぞれの価値が独立するということは、一つの論理に還元できない、異なる法則を持つ諸領域が存在することを意味することを明らかにした。政治が「多元的価値観の相剋」として位置付けられるのであれば、丸山が徂徠やスターリンに見た「政治固有の価値の独立」の意味するところは、諸価値の独立と相互対立という関係を確立することであった。例えば計算可能性のような強力な一般性を持ち、あらゆる価値を一つの基準に還元してしまう「合理性」は、諸価値をひとつの価値に統合してしまうその側面ゆえに、諸価値の相克を本質とする「政治」と対立することを示した。丸山にとっての「人間」は、先述

の通り「理性的人間観」と「個性的人間観」との二重性で理解される。この二元的対立は丸山にとって、19 世紀フランスとドイツの対立としても認識されており、したがって「近代」とはこの二つの人間観の相剋として説明される。西洋近代を理性一辺倒で理解するような見方を峻拒し、その底流にある個性的なるものを拾い上げることで、キリスト教が一面では自然を支配する病弊を胚胎しつつも、同時にそれが個性の擁護という個性的人間観の基礎になった側面を評価する。「人間として生まれたことに価値があり」、「同じ人は二人といない」という信念に立った「永久革命としての近代化」に丸山が期待を寄せた（第一部第三章）のは、上のような二つの人間観をめぐる思想的な対立を理解していたからだと言えよう。以上からこの中間考察において、丸山の思想における思想的な核として、「多元的価値観の相剋としての政治」と「理性的・個性的人間観の相剋としての近代」という原理を抽出できた。

終章では、中間考察で明らかにした「多元的価値観の相剋としての政治」と「理性的・個性的人間観の相剋としての近代」の思想的な射程を示唆した。丸山は「合理性」に対しては危機感が優位した視点を有していたゆえに、真善美の多元的な価値が相剋する場において表出する「政治」を重視し、そこにおける主体となる「人間」については、理性と個性との重畳として理解した。以上から本章では、先行研究を検討しつつ、政治が単に価値の分配である政策をめぐる多元主義的な競争原理ではあり得ないことを明らかにしつつ、その上で「多元的価値観の相剋としての政治」が個人の実存に関わる（実存主義的な）営為であるという点を示した。自己の中の自己との対話としての「思考」の位置付け（ハンナ・アレント）や、矛盾対立（「不条理」）をそのまま見つめる姿勢（「反抗」）に価値を置く実存主義（アルベール・カミュ）といった思想との近似を明らかにした。

おわりにでは、本稿の議論を要約しつつ、本稿の四つの課題を挙げた。本稿の結論としては、丸山にとっての近代が一般的な発展段階論や啓蒙主義といったものよりはむしろ、物象化や合理化といった病理に抗するための、人間観をめぐる相克として位置づけられることを明らかにした。本稿ではこのような丸山の肖像を、「合理性と格闘した近代主義者」として総括した。また本稿で挙げた四つの課題については、第一には、終章で挙げたような実存主義への射程、第二には方法論についての問題、第三には平石直昭や河野有理らによる先行研究の位置付け、第四には丸山の著作と問題意識との関係、という四つを挙げた。これらの問題については、第一の課題を今後筆者が格闘すべき大きな問題に設定し、第一の課題の探究において第二～第四の課題に取り組むことを約して本稿を終えた。